

# 杉みき子『小さな町の風景』における「風景」

黒田 苑

## 序章 「風景」という問題

一、問題の所在

本研究では杉みき子作品の「風景」について論じる。

杉みき子は新潟県旧高田市（現在の上越市）出身の児童文学作家であり、多くの作品が教科書教材に採用されてきた。「わらぐつのなかの神様」をはじめ授業研究の蓄積はあるものの、作品研究は十分になされていない。

本研究では、『小さな町の風景』<sup>1</sup>から中学校国語教材化された作品を取り上げ、中心人物の見た風景が物語でどのように語られているのかを探る。

そこで、風景論を整理する。

柄谷行人は、「風景の発見」と「内面の発見」を対応させるモデルを提示した。柄谷は、国木田独歩の『忘れえぬ人々』において、主人公によって「風景」が「孤独で内面的な状態と緊密に結びついている」と指摘し、「風景が以前からあるように」「見えるようになるのは視覚の問題ではな」く、「概念（意味さ

れるもの）としての風景や顔が優位にある「場」が転倒されなければなら」ず、風景や顔が「意味するもの」として内面的な何かを指示」されて「内面」を意味しはじめた」と主張する。坂口周も、柄谷のモデルは「認識論的な場」の転換を「文学」の問題として論じ、「近代における「文学」の新たな創出を「見ること」の制度性の転回に根拠づけたこと」<sup>2</sup>だと位置づけている。

しかし、亀井秀雄は、柄谷が取り上げる「風景」は「スケッチや回想記、小説などのジャンルにおける風景の意味の違いが読み取れ」ておらず、「回想や想起の方法のなかで構成された自然の表現ばかり選んで」いれば、「風景の記述とともに内面が現れてきたように見えるのは当然」<sup>3</sup>と批判し、「私たちが自他の感性や認識を自然とのからみで構成する時の仕組みを解明する手がかり」として、「ことばの問題を軸に自然、感性、身体性、意識などがどのようにセットされているのか」と小説の表現構造を検討することを提言する。

また、木岡伸夫は、風景経験をⅠ個人主体、Ⅱ個人的経験から集団的経験、Ⅲ集団的経験から個人的経験という三段階の展開で捉え、それに対応する風景構造として言語化以前の基層を含む経験全体を個人的水準でとらえた「基本的風景」、それを「社会的共同性」の水準で定位した語られる風景である「原風景」、<sup>⑨</sup>「原風景が社会的記憶に残し文化的な規範性を獲得する」契機となる「表現的風景」の三種に区分した。

また、風景を見る構造を捉えるため、アルジルダス・グレマスの行為項分析を援用する。グレマスは六つの行為項(主体/客体・補助者/反対者・送り手/受け手)を定めた。主体は対象を探求し、物語の表層構造では主人公として具現化される。客体は主体によって探求される。送り手は主体を対象の探求へ赴かせる。受け手は主体によって探求される対象を最終的に受け取る。補助者は主体を援助する。反対者は主体に対立する。これらの六つの行為項と風景経験の関わりを検討する。

本研究では、表現と行為項から杉みき子作品の風景経験を分析する。

## 二、本論文の構成

杉みき子作品では、中心人物によって風景が発見される。その発見による内面と風景の親和性・語り手の語りによつてどのような学が働いているか明らかにする。

第一章では、木岡伸夫の風景概念を用い、杉みき子の風景経

験について考察する。第二章では、柄谷行人の「風景の発見」から、杉みき子作品の風景の発見について六作品を分析する。第三章では、アルジルダス・グレマスの行為項分析を用い、図式化したモデルから六作品で「風景を見る」ことを中心に風景経験がどのような構造かを分析する。

## 第一章 杉みき子の風景経験

本研究では、木岡伸夫のモデルに基づき、「基本的風景」は中心人物の経験、「原風景」は語り手が語るために思い浮かべられるイメージ、「表現的風景」は、語り手によって表現される物語風景にあてはめられるものとして論じる。

では、本研究で扱う『小さな町の風景』の風景構造はどうであるうか。杉みき子は「作品にて」<sup>⑩</sup>で、自身の身近な経験から作品のイメージを構想している。「あの坂をのぼれば」は「柏崎あたりまで車で行ったとき、峠をいくつも越えた経験」をふまえ、「海に近い空の色のイメージは、直江津のバスステーションから水族館への坂道」に由来するように、車を運転した道がイメージされる。「遠い山脈」は「若いとき三年間すごした長野の、善光寺の横手の坂の上から見た山の雪が原型」であるように、かつて住んでいた町の風景がイメージされる。「飛べかもめ」は「私自身の体験」がイメージの原型である。また、対象の思い入れも作品構想のイメージとなっている。「夜のくだもの屋」は「定時制高校から帰る見知らぬ少女のために、夜

おそくまで門灯をともししておいた」友人の経験と、自身の記憶に残る「見上げるような雪道の底で、あかあかと灯をともしていた近所の八百屋さんの光景」を重ねている。「旗」は「学生時代、文芸クラブで、みんなが小さい布を持ち寄ってクラブ旗を作った」思い出からのイメージである。「にじの見える橋」は「大手町の歩道橋」から思い浮かんだイメージである。

しかし、これらの伝記的事実と物語内容は一致しない。「あの坂をのほれば」では、車の運転は歩行に変わる。「遠い山脈」では、かつて住んでいた町の風景が少年と老人の関わりが必要な風景になる。「飛べ かもめ」では、少年が主人公に変わる。「夜のくだもの屋」では、自身の友人宅を果物屋にしている。「旗」では、共同作業の在り方がクラブ活動から学級活動へと変わり、少女が引越してきたばかりであり、交通事故に遭い学校を休んでいる設定も加わる。「にじの見える橋」では、実在の建造物に杉のイメージから少年の回生物語になった。これらをはじめとして、伝記的事実が物語になるまでに設定変更がされている。

杉は、「はじめから枠を決めておくと、発想がしやすいたちなので、この連作も、たいへん楽しく書きすすめることができました」と述べていた。このように、物語の語り手には杉の書き手意識が反映されている。すなわち、物語の「原風景」には、中心人物の「基本風景」と合わせて杉みき子の「基本的風景」が投影されている。

物語の原風景の材源には杉みき子の基本的風景が投影されているが、原風景と表現的風景は実在とは異なる言語作品の語り手が表現し、また語り手や視点人物もその表現から創造される。

## 第二章 杉みき子における風景の発見

では、杉みき子作品で「風景の発見」がなされた時の中心人物のメンタリテイはどのようなものだろうか。物語で中心人物が風景を発見する経緯を確認する。

### (1) 「あの坂をのほれば」——坂

「あの坂をのほれば、海が見える」は、この短編のキーフレーズである。少年は坂を、幼い頃に聞いた「うちのうらの、あの山ひとつこえれば、海が見えるんだよ」という祖母の言葉を字義的に坂を一つ越えれば海が見えると期待して歩いていた。しかし、なかなか海が見えないため、祖母の言葉は「しごく大ざっぱなことばのあや」、すなわちルース・トーク、比喩として認識される。坂は幾重にも続き、海は当初の想定よりも遠いのである。

### (2) 「遠い山脈」——白い峰

若い頃の老人は、白い峰を発見するまでに新聞を配達し忘れるという大きな失敗をし、「おやじさん」に厳しく叱責される。しかし、老人は「もう新聞配達なんかやめちまおうと、腹だち

まぎれにここまでのぼってきて、ぐうぜんに、あの山を見つげ」た。このように、若かりし老人が見た白い峰は、新聞配達の失敗を昇華するものであった。

この白い峰は、時を経て、老人から少年に継承される。

白い峰は「いままで見たこともなかったひとつの峰」と語られるように少年は峰を見たとき、その美しさに感動する。一方で、「かれに、かれだけに語りかけているようなその純白の山頂」とも捉えられている。老人にとつて峰との繋がりが強いように、少年においても峰と自分との距離が遠くとも、互いが点と点を結ぶように繋がっていると認識される。

### (3)「夜のくだもの屋」——果物屋の灯り

少女が駅から自宅まで向かう道なりは暗くなるのが早い地域であった。特に「少女の住む町はずれの団地近く」には、商店があるものの、「宵にもならぬうちから店をしまて」しまい、店が並ぶ通り道が暗い道であることが分かる。この暗い夜道を歌いながら歩く少女は「なかばそれをいいことに、なかば心ほそさをまぎらわす」と表現されるように、歌いたい一方で心細いのである。

合唱コンクールの練習が長引いて帰宅がさらに遅くなった日、少女は父親に迎えに来てもらった。しかし、父親に練習が長引いたことを悪く言われ、練習に熱中する少女は少し理不尽さを感じつつ歩いていると「例のくだもの屋が、まだ明るい店

をひらいている」ため、少女は安心することができた。少女は後に果物屋の夫婦から少女の帰り道を照らそうと店を開けてくれていたことを知る。夜の果物屋の灯りは夫婦の思いやりの光であると共に、それを感じた少女の心の明るさでもある。

### (4)「旗」——レモン色の旗・クラス旗

交通事故で自由に動かせない身体と、転校で変わってしまった教科書をはじめとする環境は、少女に大きな影響を与えている。テレビ番組にも面白みを感じないほど、日常がつまらないものになっている。また、少女は引越してきて間もない事故であったため、物理的に友達を作る時間もなかった。家の中で「じっとしているしかない」少女は、退屈な日々を送っていた。「むかいがわの家なみの、黒ずんだ屋根ばかり」しか見えない日々の中で、少女は目の位置のちょうど正面が、切りぬいたようにぽっかりとあいていて、その四角い空間の中に、レモン色の旗がひるがえつてい」ることに気づく。少女は旗を「めざましいもの」と捉えている。この「めざまし」さは、それまでの退屈な日々に対しての「めざまし」さである。「じっとしているしかない」少女は、住み慣れない町の住環境になじめなさを感じていた。このように、少女はレモン色の旗をそれまでの日々のなじめなさをもって見ている。

レモン色の旗は後に級友によってクラス旗に変化する。

少女は一週間前に級友が家に来てくれたから親しみを感じて

いた。しかし、それから音信不通になったことに不満を抱く。今まで訪問できなくて悪かったと話した級友の言葉がその場しのぎの「気休め」に思え、本心を打ち明けたことを「くや」み、数日後の登校に際し「心はなんとなくはずま」ない。このような状況で登校復帰の前日の日を迎えるため、少女は級友たちとの人間関係に不安をもつてクラス旗はイメーჯされた。それが希望に変わるのはクラスに受け入れられたと感じた後である。

(5) 「飛べ かもめ」——かもめ

家出した少年は、勢いに任せて行くあても決めず電車に乗るが、窓から外を眺めながら放心していた。「面目失しないで帰宅するにはどうしたらよからう」と家出したことを後悔しているも、「すぐさままた、なんとかなるさ、帰るもんか」と反抗している。ここには、少年の意志が弱さとどうすることもできない自身の心の葛藤が表れている。

少年はかもめを発見し、窓に張り付いたように飛ぶ様子を見続ける。かもめは「この少年に、ぬきさしならぬ用でもあるかのように」見えるように語られる。このように、少年はかもめを家出した後悔と反抗心の葛藤をもつて見ている。

(6) 「にじの見える橋」——虹

頭上で「雨がやんだことに気づかな」い少年は、最近「うまくいっていない」ことに思いを巡らせる。テストの成績が悪く、

母親に「課外の活動をやめろ」と言われたこと、「親しかった友だち」との仲違い、「好きなレコードを買う小づかい」の不足などである。これらの出来事から、少年は「雨は、自分の上にはばかり降るような気がする」とあるような自身に運のなさ(自然に恵まれていないこと)を感じている。少年は虹を見るまでは日常にやりきれなさを抱えていた。

しかし、虹がでたとき、仲違いした友だちは、少年を発見し声をかける。少年もそれに応え、掛け合っていく。友だちは「さっきの少年とおなじ衝動にかられたように走」るように、虹を全部見たいという思いに心動かされる。互いに仲直りしようとする方向性が示され、二人は虹という風景の視野を共有しようとする。

杉みき子の「風景の発見」は、六作品いずれも中心人物の意識でなされ、風景と主体とは親和している。

第三章 「風景を見る」——ことこの行為項分析

一、はじめに

アルジルダス・グレマスの六つの行為項(主体/客体・補助者/反対者・送り手/受け手)をもとに、物語内容レベルでの「風景を見る」ことこの行為項分析をする。中心人物が風景を見るまで(主体↓客体)は前章で述べたとおりである。風景を見てからの中心人物の行為項分析(主体↓客体↓受け手)を行う。グレマスの行為項分析を「風景を見る」ことを中心に当ては

めると、物語の前半と後半の風景の発見において、視点人物が心情変化することが多いことが分かった。ただし、物語内容によって心情の変化が見られないものや、一つのものもある。それらを「見たことによる風景経験」と「可能性の風景経験」に分類する。

二、見たことによる風景経験——「遠い山脈」「夜のくだもの屋」「旗」「にじの見える橋」

(1) 「遠い山脈」——風景①と風景②について

——ふしぎな話だが、あれを見つけたとたん、もう新聞配達をやめるの、やめないのなんてどうでもよくなった。あんな美しいものが世の中にあつて、それを自分だけが知っている。そのことがなんともいえず、うれしくて、ほこらしくてね。それからは、あの山が見てくれるかぎり、なんでもできるような気がしてきた。いや、それは、そう思うばかりで、じつさいには、たいしたことでもできなかったがね。

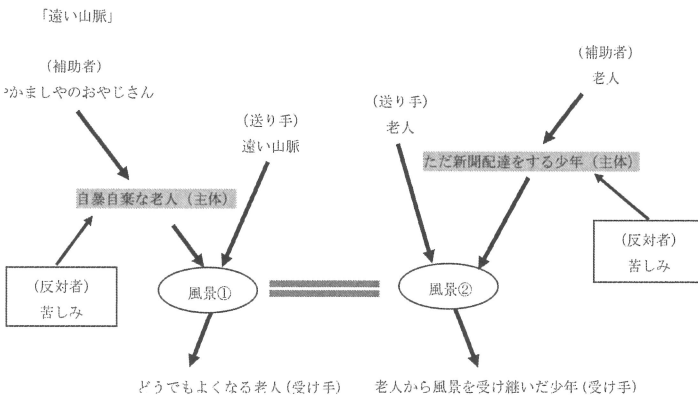
白い峰を見た老人は、自暴自棄になっていた自身をどうでもよく思うようになった。それは、「大きな岩のほとりの一定の角度」からしか見えない風景を獲得して、自身が誇らしく思うようになったからである。ここで、失敗して自暴自棄になつて

いた老人が、失敗を乗り越えた老人へと変化する。このようにして、老人は新聞配達の失敗を白い峰を見ることで乗り越えた。白い峰を客体とする風景②も風景経験によって主体の中心人物の変化が現れた。

あくる日、老人の姿

はベンチになかった。少年は、きのうの場所にかけてのほり、岩かげのわずかなすきまから、白い紙のような遠い山をうかがあがるのに見とれながら、あの老人が一生をかけて心にあたためつづけてきたものを、自分がいまはつきりと心に受けていたのを感じていた。

少年は風景を獲得してから、老人に教えてもらった場所へ行き、再び風景を見る。風景



を見たとき、「あの老人が一生をかけて心にあたためつづけてきたものを、自分がいま、はつきりと心に受けついだのを感じ」たように、新聞配達をする日常に風景を見守る役割が加わった。白い峰を見たことによって、ただ新聞配達をする少年から老人から風景を受け継いだ少年へと変化する。

しかし、この老人の風景の伝承は、誰にでもされ得るわけではない。少年と老人の新聞配達の経験という共通項があって現れてくる。

(2) 「夜のくだもの屋」―風景③と風景④について

暗い夜道にこの店のあかりがさしているだけで、わけもなく心がおちつくのをおぼえ、少女は、とぎれた歌をまた口ずさみながら、かばんを持ちなおして家へいそいだ。

くだもの屋の営業時間延長は、その日かぎりのことではなかつたらしい。つぎの日も、そのつぎの日も、少女は、くだもの屋のあかりに守られながら、暗い夜道を帰った。

心細さを抱いていた少女は、一人で夜道を帰る不安に苦しめられていた。しかし、くだもの屋の明かりを見て心が落ち着いていた。それからの日も、少女は風景を見ることができた。「くだもの屋のあかりに守られながら」とあるように、くだもの屋の明かりは少女を守る存在として描かれている。くだもの屋の明かりを見たことによって、心細さを抱いていた少女は、安心して

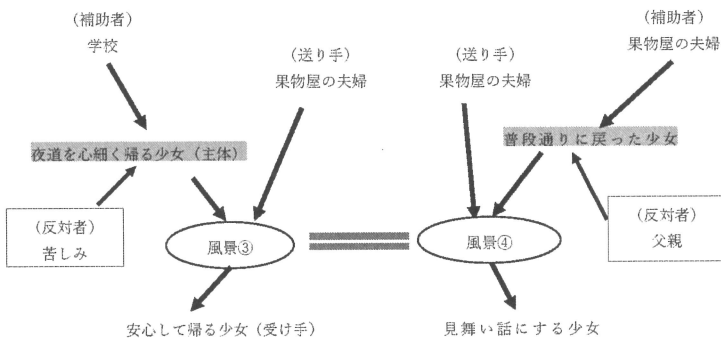
て帰る少女へと変化した。

くだもの屋の明かりを客体とする風景④も風景経験によって主体の中心人物の変化が現れた。

少女は、ふたたび、声もなかつた。この店のあかりがあんなにあたたか、かく見えたのは、当然だったと思う。コンクールが、終わってからは早く帰れることを話し、少女はもういちど頭をさげた。

コンクールが終わって暫くが経ち、少女は友人の見舞いの品を買いに再び果物屋を訪れる。そこで、少女は果物屋のおばさんが自分のために夜遅くまで店の明かりを点けていたことを知り、感動する。

「夜のくだもの屋」



その感謝は決められた予算よりも「もっと、もっと、たくさん買いたい」と思うように、果物と見舞い話の形になった。

(3) 「旗」―風景⑤と風景⑥について

少女は旗を見つめ、思わず窓にむかって手をのびした。あの旗をつかまえない。生命力にみちあふれたような、あの旗に手をふれば、この折れた足をひきずりながらも、空の高みまでのぼっていくことができるのではあるまいか。そう思っているだけでも、心はすでに旗となつて、空をかける風たちとあそぶ心地がする。

少女はレモン色の旗を見て、旗に親しみをを感じるようになる。「あの旗に手をふれば、この折れた足をひきずりながらも、空の高みまでのぼっていくことができるのではあるまいか」「心はすでに旗となつて、空をかける風たちとあそぶ心地がする」とあるように、少女は身体的自由がない反面、精神的自由を謳歌する。退屈な日々になじめなかった少女は、日常に親しみを持つ少女へと変化する。

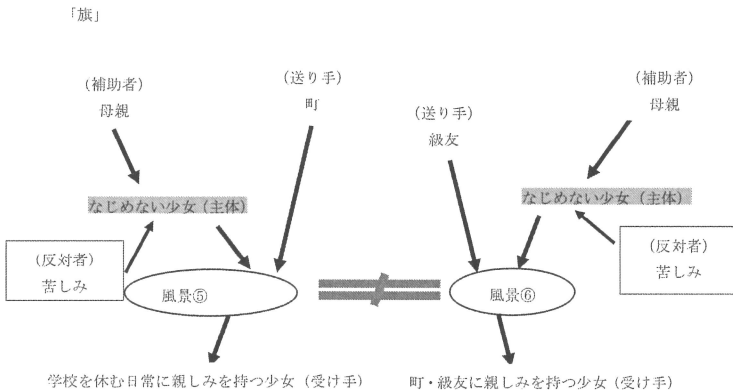
クラス旗を客体とする風景⑤も風景経験によって中心人物の変化が現れた。

——あなたが出てくるまえに、どうしてもあの窓から見てもらいたいと思つて、みんなだむちゆうになつて縫つたのよ。

わらいながら話す友だちにほほえみかえしながら、少女は、この町へ引っこしてきてよかつたど、心から思つた。

少女は登校前日にクラス旗を見て驚いてた。そして、登校日、クラス全員から歓迎される。少女は「少女は、この町へ引っこしてきてよかつたど、心から思う」ように、親しみを持つようになる。クラス旗を見たことによつて、友達に不満を抱いていた少女が親しみを持つ少女へと変化する。

旗は住環境によつて切り取られた枠組みで映る風景であった。旗は物語内で、レモン色の旗からクラス旗に替わつていく。この風景





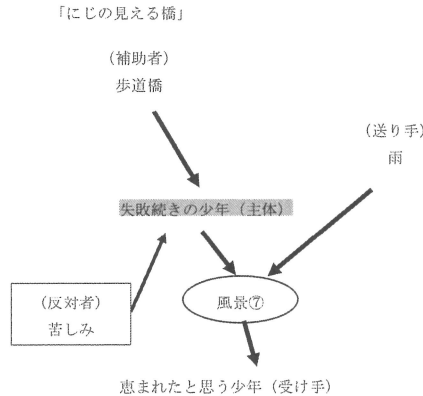
の外的変化とともに少女の内的変化が起こっている。また、補助者と反対者が、風景⑤と風景⑥の変化で少女側から級友側へと反転する構造をとったものになった。

(4) 「にじの見える橋」——風景⑦について

目の下を、車の列がたえまなく流れてゆく。かさをすぼめた人たちが、上も下も見ないで自分の道をいそぐ。だれも、頭上のできごとに気づかない。あるいは気がついても、なんとも思わないのか。だれひとり、立ちどまって、この大空のドラマにながめいるものはない。

少年はふと、はじめて、自分のことを恵まれたものと感じた。

少年は虹を見てから、自身と目の下にいる人を比較する。どの人も「上も下も見ないで自分の道をいそぐ」、  
「頭上のできごとに気づかない」「あるいは気がついて、なんとも思わない」。「立ちどまって」「この大空のドラマにながめ



るものはない」ように、目の下にいる人は「この大空のドラマ」に価値を見出さない。少年と目の下にいる人の視差が、少年を「恵まれたもの」に感じさせている。このように、恵まれていないと感じていた少年は、虹を見たことによって恵まれていると思う少年に変化する。

物語では雨が上がったら虹が見えるという自然現象が比喻される。そして、それを歩道橋で見ることによって、にじの風景が見える場所と見えない場所が比較され、少年の心境の変化がなされる。

第二節で扱う四作品にはそれぞれ風景(客体)を見る主体と、見た受け手の中心人物に心境の変化が現れた。しかし、その物語の風景の仕組みは異なる。

三、可能性の風景経験——「あの坂をのぼれば」「飛べ かもめ」  
「にじの見える橋」

(1) 「あの坂をのぼれば」——風景⑧について

——もう、やめよう。

きゆうに、道ばたにすわりこんで、少年はうめくようにそう思った。こんなにつらい思いをして、坂をのぼったりおいたりして、いったいなんの得があるのか。このさき、山をいくつこえたところで、ほんとうに海へ出られるのかどうか、わかったものじゃない……。

ひたいにじみでる汗をそのままに、草の上になすわって、  
 とおりぬける山風に吹かれていると、なにもかも、どうでも  
 よくなつてくる。

少年は山道の坂の多さに耐えることができず、山を越えて海へ  
 行くことに諦めの気持ちを抱く。添い寝の祖母を信じていたが、  
 何度「あの坂をのぼれば、海が見える」と呪文のように唱えても  
 海は見えてこない。語り手は、少年が「こんなにつらい思いをして、  
 坂をのぼったりおりたりして、いったいなんの得があるのか」「ほ  
 んとうに海へ出られるのかどうか、わかつたものじゃない」といつ  
 たつらい心中を吐露したように表している。このように、少年は

添い寝の祖母の言葉のイメージと異なる現実の坂の多さに絶望し  
 ている。しかし、少年の絶望は海鳥との出会いによって変化する。

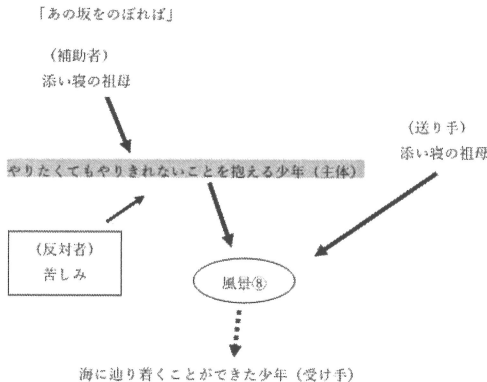
海鳥がいる。海が近いのにちがいない。そういえば、あ  
 の坂の上の空の色は、たしかに海へとつづくあざぎ色だ。  
 こんどこそ、海につけるのか。

坂の多さに絶望していた少年は海鳥を発見し、海が近いとい  
 う確信を得る。坂から臨む空の色を根拠に奮起する。それでも  
 「ややためらつて」いたが、海鳥が落とした羽根を手にして、  
 翼を得たように再び坂を上つていこうと行動に移していく。

白い小さな羽根を手のひらにしつかりとくるんで、ゆっくり  
 と坂をのぼってゆく少年の耳に―あるいは心の奥にか―かすか  
 なしおぎのひびきが聞こえはじめていた。

引用は、少年が坂を上つて海を見るだろうと予感する情景描  
 写である。この予感が現れることによって、自己実現に大きな  
 困難を抱えていた少年は、坂を上つて海を見ることをやり遂げ  
 る少年へと変化する方向性が示された。

「あの坂をのぼれば」は、語り手が、少年が海を見るかもし  
 れない予感を与えて終  
 わる。さらに、少年が  
 海を見て自己実現を果  
 たした姿も描かれな  
 い。語り手の物語の切  
 り取り方は、少年が坂  
 の多さを克服して再起  
 する部分に価値が置か  
 れている。言い換えれ  
 ば、それほど苦しみ(反  
 対者)が大きなもので  
 ある。



(2) 「飛べ かもめ」―風景⑨について

少年は、鳥から目がはなせなくなった。無意識にこぶしをにぎりしめ、がんばれ、がんばれ、と小さな声をたてた。列車なんかには負けるな、ぼくなんかには負けるな。このいくじなしのぼくなんかに――。

少年はかもめを発見し、自分自身を見つめ直す。少年自身とかもめを比較し、全力で羽ばたくかもめを鼓舞している。この場面の少年は、「ぼくなんかには負けるな」「このいくじなしぼくなんかには」と自身のやるせなさを受け止めている。同時に、それは弱気な少年自身を鼓舞させる原動力となる。

そして、窓から見えなくなったかもめは、少年に自力で帰ろうとする意志を与える。

――このつぎの駅でおりよう。そして、砂浜を走って帰ろう。

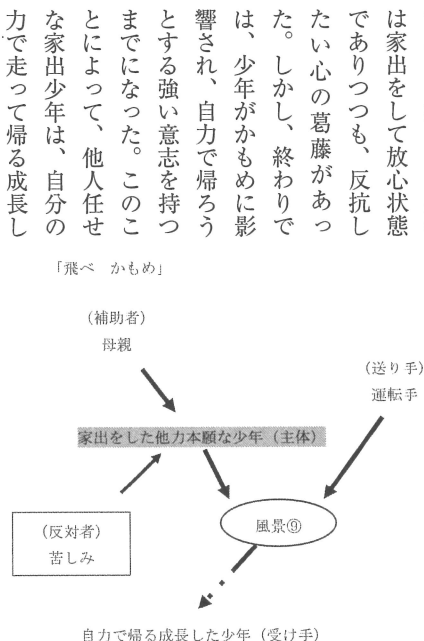
少年の胸に、足の裏をさすざらざらした砂の感触が、なまなましくよみがえった。

列車はカーブをまわり、速度を落としはじめる。少年は、ひとみに光をとりもどして、いきおいよく立ちあがった。

かもめを見送った少年は「このつぎの駅でおりよう」そして、砂浜を走って帰ろう」という決心をする。「足の裏をさすざらざらした砂の感触が、なまなましくよみがえった」ように、過去にやる気に満ちて走っていた感覚が蘇ってきている。「ひとみに光をとりもどし」「いきおいよく立ちあがった」ように、少年はかもめに影響され、やる気を奮い起こし、全力で頑張ろうという意志の強さを持つこともできた。

どこかで雨があがったのか、海に大きなしが出ている。

引用は、少年の心の暗さと明るさの変化を象徴する情景描写である。始めは、少年は家出をして放心状態でありつつも、反抗したい心の葛藤があった。しかし、終わりは、少年がかもめに影響され、自力で帰ろうとする強い意志を持つまでになった。このことによって、他人任せな家出少年は、自分の力で走って帰る成長し



た少年へと変化する方向性が示された。

「飛べ かもめ」は、少年が強い意志を持ち、自力で走って帰ろうとした場面までで終わる。さらに、少年が走って帰宅し成長した姿を母親に見せる姿は描かれない。語り手の物語の切り取り方は、少年が自分自身の弱さと向き合い克服する部分に価値が置かれている。

### (3) 「にじの見える橋」——風景⑩について

——おい、なにしてんだあ。

下から呼ばれて、身をのりだすと、仲たがいはしたはずの友だちが、かばんをふりまわしながら、あきれたようにこちらを見あげている。

——おい、にじが見えるぞう。あがつてこいよう。

少年も大声で呼びかえず。友だちは、少年のゆびさすほうをひと目見て、さっきの少年とおなじ衝動にかられたように走りだした。歩道のはしにけつまずいて、かばんをほうりだし、あやうくころびかける。

——早く早く。

少年はわらいながら、からだをずらして、にじを正面に見る場所をあげ、友だちがのぼってくるのを足ぶみしながら待った。

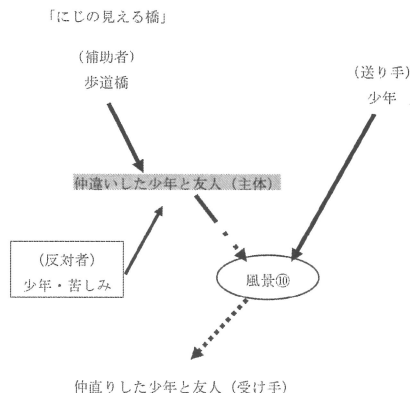
友人は少年を見つけ、声をかける。恵まれていると自覚し始めた少年は、仲違いしていた友人と一緒ににじを見ようと誘う。少年と友人は意図せず仲直りの機会にも恵まれた。そして、歩道橋は少年と友人をつなぐ橋となった。二人で風景を共有しようとすることによって、それまでは仲違いしていたものの、仲直りの方向性が示される。

「にじの見える橋」では、物語のはじめに情景描写が挿入されている。

雨がやんだ。

頭上の雲が切れて、わずかな青空がのぞく。

引用は、少年の悩みが晴れるだろうと予感する情景描写である。この予感が現れることによって、心にもやを抱えていた少年は、悩みが晴れて解決することができる少年へと変化する方向性が示された。この自然風景の描写は自然現象が比喩で



用いられている。実際に、その後の物語の展開では、少年はにじを見ることでできたことで自身を恵まれたものに感じる。少年と友人の仲直りは、少年が抱えていた苦しみの一例であった。「にじの見える橋」は、語り手が、少年と友人が仲直りするかもしれない予感を与えて終わる。さらに、少年と友人がにじと同じ場所と一緒に見る姿も描かれない。語り手の物語の切り取り方は、少年が自身を見つめ直し恵まれたものに感じる部分に価値が置かれている。

第三節で扱う三作品にはそれぞれ風景（客体）を指す／見た主体と、受け手の中心人物の進境の方向性が情景描写によって示される。しかし、実現の難しさによって語り手が切り取る進境が異なっている。風景経験が達成されないほど、語り手によって中心人物の苦しみと実現する価値の大きさが意味づけられている。

### 終章 まとめ

杉みき子『小さな町の風景』の六作品において、視点人物が風景を見ることによって、心理的成長が起きるが、成長後の時点ではそれは最初からあったかのように意識される。そうした風景と語り手・視点人物の親和性が裏切られることはない。それは風景を我が物とする受容化の実践でもあった。

(1) 杉みき子『小さな町の風景』（偕成社 一九八二・九）。初出は、「あ

の坂をのぼれば」(『日本児童文学』一九八一・一二)、「遠い山脈」(『日本児童文学』一九八一・一二)、「夜のくだもの屋」(『日本児童文学』一九八二・四)、「旗」(『日本児童文学』一九八二・五)、「ふたたびかもめ」(びわの実学校一九七九・三、後「飛べ かもめ」に改題)、「にじの見える橋」(『日本児童文学』一九八二・三)。

(2) 『日本近代文学の起源 原本』(講談社文芸文庫二〇〇九・三)三三二頁。

(3) 前掲『日本近代文学の起源 原本』七二頁。

(4) 前掲『日本近代文学の起源 原本』八一頁。

(5) 『意志薄弱の文学史 日本現代文学の起源』(慶應義塾大学出版会 二〇一六・一〇) 一一頁。

(6) 『増補 感性の変革』(ひつじ書房二〇一五・五) 三三二頁。

(7) 前掲『増補 感性の変革』三五～三五二頁。

(8) 『風景概念の基本構成』(『文學論集』二〇〇五・一〇)。

(9) 『構造意味論』(紀伊國屋書店一九八八・五)。

(10) 注8に同じ。

(11) 『杉みき子選集3 小さな町の物語 小さな町の風景』(新潟日報事業社 二〇〇六・一)。

(12) 注9に同じ。

付記 本稿は、二〇一八年度に富山大学に提出した卒業論文「杉みき子『小さな町の風景』における「風景」——中学校教科書教材から」を圧縮したものである。

(くろだ・えん 福井大学院生)